
浮気後のラーメン

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

浮気後のラーメン

【コード】

N9633C

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夫の浮気相手は何と男だった。復讐を決意した妻の取った行動は、コメディータッチの浮気話です。

第一章

浮気の後のラーメン

片岡小百合が自分の夫をおかしいと思いついたのには理由があった。その理由は簡単で夫の帰りが毎晩やけに遅くなったのだ。最初は仕事が忙しくなったのかと思つたがどうやら違うのだ。

まず身なりが急に格好よくなった。それまではとかく服装に無頓着だったのに急に気を使うようになったのだ。

次にダイエットをはじめた。それもかなり真剣にだ。そのせいか数ヶ月したらまるで別人の様に痩せてしまった。それでいて毎晩帰りが遅い。これで変に思わない妻もいないだろう。

「浮気ね」

すぐにそれを予想した。こうした予想はえてして当たるものである。

すぐに探偵を雇つて夫の恒久の周りを調べてもらった。すぐにその探偵から報告が来た。

「実はですね」

探偵事務所では話を聞く。探偵事務所は子供の頃読んだ推理小説のそれとは全く違い小さくて殺風景だった。シャーロック・ホームズも少年探偵団もいなければエルキュール・ポワロが座る安楽椅子もなかった。強いて言うならばフィリップ・マーロウのそれに近いだろうか。殺風景な部屋であった。

「申し上げにくいですが」

探偵も映画やドラマに出て来るような探偵ではない。何処か関西の漫才師を思わせるひょうきんそうな顔立ちに痩せた身体をしていてその身体を地味な色のスーツで包んでいる。これでしゃもじを持つて喚んでいるだけ取り柄の何の芸もない小百合が大嫌いな落語家崩れならば仕事を依頼しなかつただろうと心の中で思つたりもしている。その探偵に見えない探偵の話を聞いていた。

「御主人は」

「浮気をしているのですね」

「まあそうなります」

はつきり言えばいいのに何故か歯切れが悪い。小百合はそれをいぶかしんだ。

「何かあるのですか？」

「いえですね」

探偵はその歯切れの悪い返答を続けた。

「そのですね。奥様は浮気についてどう御考えですか？」

ぶしつけに小百合にこう尋ねてきた。

「宜しければお話下さい」

「主人が他の女の手に手を出すことでしょうか」

小百合は少し考えてからこう答えた。

「そうではないのですか？」

「それが違うのです」

探偵はこう述べてきた。

「そのですね。つまり」

「つまり？」

「あれです」

その歯切れの悪い言葉を続ける。顔と同じく言葉遣いも関西の訛りがある。やはり探偵には見えない。

「御主人は浮気をされています。ですが」

「ですが？」

「相手の方は女性ではないのですよ」

「といたしますと」

小百合も言葉の意味がわからなかった。

「その。女性ではないとしますね」

「ええ」

やはり言葉の意味がわからない。首を傾げさせもする。

「それですと一つしかありません」

「よくわからないのですが」

本当にわからないのでその言葉を返した。

「何が何なのか」

「そうですね」

探偵は小百合があまりにも事態を把握できないでいるので覚悟を決めた。そうしてオブラートに包まずに正直に彼女に言うのだった。固い決意と共に。

「では言いますね」

「はい」

小百合も彼の言葉に頷く。深刻な顔の探偵に対してやはり彼女はほんとした顔をしていた。その表情がまるで騙し絵でひっくり返る表情の様に对象的だ。

「御主人の浮気相手は」

「浮気相手は」

「男子高校生です」

一言で済ませた。

「えっ!?!」

「だからですね」

事情が掴めていない小百合にまた言う。

「男の子なのですよ」

「あの、それは一体」

小百合は目をさひばたかせてまた探偵に問うた。

「どういうことですか？主人がああ、その」

「ですから。御主人は男の方と浮気をされているのです」

彼はまた小百合に述べた。

「おわかりでしょうか」

「ということはどうですか」

小百合もようやく事情がわかってきた。それまでにかなり時間がかったが。

「主人は。ゲイですか」

「そういうことになります」

探偵は告げるのだった。医者の方の宣告よりも深刻な顔で。

「私も見て驚きましたが」

「はあ」

小百合はまだ信じられなかった。浮気をしているとの覚悟はあったがそれがまさか男に対してとは。何と云っていいのかわからなかった。

第二章

「何とまあ」

「驚かれましたか」

「どつきりカメラではないですよね」

「今度はぼけてしまった。それも思いたくなつたのだ。」

「それは。その」

「残念ですが違います」

「探偵はまた告げた。」

「これは本当のお話です。証拠写真もありますし」

「ですか」

「はい、これです」

小百合の前に差し出した一枚の写真には確かに恒久がいた。彼はにこやかに隣にいるまるで女の子みたいな感じの綺麗な男の子と一緒にいたのだった。すぐ側にはホテルがあるので何をしに行くのかは一目瞭然であった。それ位は彼女にもわかった。

「これが証拠です」

「男とですか」

「浮気には違いありませんが。如何ですか？」

「何と申し上げていいかわかりません」

小百合は大きく息を吐き出してから答えた。それが今の彼女の偽らざる心境であった。

「こんなこととは」

「やはり女の人が相手の浮気だと思われていましたか」

「普通はそうでないのですか？」

小百合はその問いに逆に問い返した。

「それが。こんなことに」

「普通は浮気が発覚したら離婚だ慰謝料だ喧嘩だとなるものですが、それはあくまでその浮気が普通の場合ならばである。普通の浮気」

でなければ中々そうはならないものなのかも知れない。

「どうされますか？」

「女ならそれを考えていました」

小百合はまたしても正直に答えた。

「やはり。許せませんから」

「そうですね。あくまで浮気相手が女性なら」

「男の子なら何と言えばいいのか。これも浮気かどうか」

「一応浮気になると思います」

探偵は言うのだった。結構自信ありげな声であった。

「何回かこういったケースにも遭遇していますし」

「何回もですか」

「ええ、まあ」

これはこれで驚くべき話であった。こうした同性愛の浮気もままあるということだ。まさに事実は小説より奇なりである。もっとも日本では昔から同性愛は普通なのだが。

「そうした場合皆様奥様と同じ顔を為されますね」

「でしょうね。私もどうするべきか」

考えかねていた。浮気相手が女なら本気で怒る。しかし男なのだ。自分と同じ性の相手に対する人間特有の嫉妬も憎悪も沸きはしない。狐につままれた感じだ。その感じのまま彼女は考えを混乱させていた。今探偵を前にしてもしきりに首を捻っていたのだ。

「わかりません」

「そのところはよく御考えになって下さい」

探偵はそう告げるのだった。

「よく。宜しいですね」

「はあ」

「とりあえず私の仕事はこれまでです」

探偵は言った。

「そういうことで。宜しく御願います」

「わかりました。それでは」

報酬を支払い探偵事務所を後にする。だが小百合はこれからどうするべきか真剣に悩んでいた。とにかくこんな事態は想像だにしていなかったのか。

「男と浮気」

まずそれが信じられない。浮気なのかさえわからない。しかし心の中に何とも言えない鬱々とした気持ちも湧いてくる。それが抑えられないのも事実だった。

そうした気持ちを抱き続けたまま家路についていた。その時であった。

擦れ違った女の子がいた。高校生位で背は低く黒く長い髪をストリートにしている。顔は白く目は大きくて丸い。まるで人形のような女の子でミニスカートにしたグレーの制服がよく似合っていた。

「あら」

綺麗な娘ね、そう思った。それと共にあることを思いついたのだ。つた。

「そうね」

それを思うとついつい口に笑みが出る。その時に恒久のこともわかった。

「そういうことね。それじゃあ」

笑いが止まない。含み笑いだがその含み笑いのまま今擦れ違った女の子に声をかけるのだった。

「ちよつと貴女」

「はい？」

振り向いた女の子はやはり綺麗だった。この娘が相手なら。小百合は心の中で密かに思いながら今から自分がすることを考えていた。

第三章

それから数日後。小百合は夫の帰りを自宅で待っていた。やはり帰りは遅い。彼女はキツチンのテールに座って彼を待っている。何故かエプロン姿でなく綺麗なスーツを着ている。鮮やかな青のそれはスカート丈も短く彼女の脚線美をはっきりと見せていた。結婚しているようには見えない綺麗なスタイルだった。しかも髪も整えて化粧までしている。まるで今から外出、いやデートに行くようであつた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「いやあ、残業でね」

いつもこう言うのだ。真相がわかればこれ程白々しい嘘はない。だがどうしても言うのはやはり後ろめたいからなのだろう。例え相手が女でなくとも。

「大変だったよ。くたくた」

「お料理できていないわよ」

「そうかって……えっ!？」

できていないと言われて驚いて声をあげる。

「じゃあ今晚はどうすれば」

「さあ。インスタントラーメンでも作れば？」

小百合はにこりと笑って夫に言うのだった。

「私今から用事あるし」

「用事って。そういえば御前」

恒久はここでようやく妻の今の姿に気付いた。

「何だよその格好。何処に行くんだよ」

「デートに」

小百合はまたしてもにこりと笑って夫に告げた。

「今から行くのよ」

「行くつておい」

「何か悪い？」

咎めようとする恒久に対して平然とした顔で言い返した。

「相手は何処にいるんだ。そもそもな」

「ねえ」

ここで小百合は扉の方に顔を向けて誰かに声をかけた。

「用意はできた？」

「はい」

「はいつておい」

今の返事は女の声だった。恒久はその声を聞いて妙な感じを抱いた。それと共に何か勘に来るものがあつた。おそらくそれは彼だけが感じるものであるうが。

「そちらに来ていいですか？」

「ええ、いいわよ」

「わかりました。それじゃあ」

小百合に言われて部屋に入って来たのは綺麗な女の子だった。黒い髪と瞳が清純ですらある。白いワンピースのミニに身を包んでいる。

「あら、いいじゃない」

小百合は彼女のワンピースを見て目を細めさせた。

「似合つてるわよ」

「有り難うございます」

「どうかしら、あなた」

小百合は恒久に顔を向けて彼に問うた。その顔はやけに嬉しそうに笑みを浮かべている。それが誰に向けられたものかはもう言うまでもなかった。

「似合つてるでしょ、その娘」

「ああ、よくな」

恒久は妻の言葉に応えた。応えると共に全てを察したのだった。

「そういうことだったんだな」

「わかったのね」

「今な」

顔が苦笑いになっていた。これでは文句のつけようがない。

「これで貸し借りなしね」

「まさかそう来るとはな」

「目には目よ」

小百合は笑って述べる。

「そういうこと。いいわね」

「いいさ」

こう答えるしかなかった。自分が先だったからだ。

「行って来いよ、二人でな」

「じゃあ。行きましよう」

「はい」

女の子は小百合の言葉に笑顔で頷く。小百合は席を立ち彼女の方に行ってその肩を抱いた。その時に夫の方を振り向いて言うのだった。

「御飯はラーメンでも作って食べて」

「ああ、わかったよ」

夫が頷くのを見るとすぐに家を出てしまった。残った恒久は暫くテーブルに一人座っていたがやがてキッチンの方向に向かってそのラーメンを作りだした。

ラーメンができると井には移さずそのまま食べた。その中で一人呟くのだった。

「お互い様ってやつだね、全く」

不思議とラーメンはラーメンの味がした。こうした場合はよく味がしないと言われているが今回は違った。どうにも狐につままれた感じもするし妙な気分だった。それでもとりあえずはラーメンは美味かった。その味だけは今はわかった。

浮気後のラーメン

浮気後のラーメン

完

2
0
7
・
9
・
2
1

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9633c/>

浮気後のラーメン

2009年5月16日21時47分発行